天　界

（第六卷）　第六十三號　大正十五年四月

春

春來れば
曠野の末に水ぬるむ
小川の岸に野茨の
白き花亂れ咲く如く。

春來れば
蒼窮の果て，光みち
深淵の底ゆ，もろもろの
星の花亂れ飛ぶ。

冬ごもり
春去り來れば夜の空
やはらかく風ぬるむ
人の子よ。仰がずや
天上の花。時は今

亂れ咲く，地上の花は
春去れば散り逝くものを
亂れ咲く，み空の星は
とこしえに微笑むものを。

されば君，人の子よ。
大空の常世の花を
仰がずや，時は春
夜は暖にして風ぬるむ。

『さり亂し心せはしき日も過ぎて
夕げの後の珈琲に
リモネを捧ろ心』もて，
人の子よ語れ，春の夜に
亂れ散る星々を。

——星見小路——